



佐渡kids生きもの調査隊代表团 中国へ！

環境省が主催する日中トキ子ども交流事業に、佐渡市の小学生からなる佐渡kids生きもの調査隊の代表13名が参加することになり、8月16日に中国へ向けて佐渡を出発しました。

この交流事業は、近藤環境副大臣が中国林業局を訪れた際、日中友好による子ども同士の交流が計画され、環境省から佐渡市に協力依頼があり実現するもので、今回が第1回目となります。日中友好のシンボルともなっているトキを通して、子どもたちの交流を深めるとともに、生物多様性の重要性を学習することを目的としています。

代表团は17日に中国へ到着すると、21日までの行程で陝西省洋県ト



中国の小学生との交流

キ救護飼養センターや野生のトキの観察、また、地元の小中学生による研究発表会や生きもの調査等の交流を行い、22日に

帰国。その後、環境省を訪問し、近藤副大臣に成果を報告しました。子どもたちの目線から感じ取ったことや学んだことを、ぜひわたしたちにも教えてほしいと思います。

◆市役所農林水産課 生物多様性推進室
トキ政策係（第2庁舎） ☎63-37761

ご寄附ありがとうございました



8月8日、市役所第2庁舎内でトキ環境整備基金への寄附金の贈呈式が行われました。東京都八王子市在住の佐藤様（写真左）より、トキの野生復帰の取組み支援として100万円のご寄附をいただきました。

ご芳志は、トキ保護増殖およびトキの生息環境整備のために活用させていただきます。

ありがとうございました。



世界遺産登録に向けて

佐渡金銀山絵巻をひもとく(2)

― 敷内(坑道)の灯り ―

真つ暗な敷内では、照明が欠かせません。慶長・元和年間（1596～1623）頃は、松脂を笹の葉で包んだ、松蠟燭が大量に使われていました。

その後、ヒノキを薄くけずって縄にした物に油をしみこませ、それを棒に巻きつけ灯をともし、紙燭（ししよく）にかわりました。

宝暦年間（1751～63）頃に描かれた「佐渡銀山往時之稼行絵巻」では、長い柄に油を入れた鉄の器をぶら下げて灯りをともし「釣（つり）」と一緒に紙燭が確認できます。また、留まって作業する場所には、素焼きの皿に油を入れて灯りをともし、灯明皿もしくは油皿といわれるものもありました。

灯明の油は荏桐油（じんとうゆ）という桐の実からつくったもので、若狭産の物が有名です。別名、若狭油ともいいました。

金銀の産出が減ると、寛政6年（1794）に安価な魚油に切り替わりました。その後、文化11年（1814）には魚油を2割減らし荏桐油と混ぜて用いましたが、それでも匂いと煙で大変苦労したものと考えられます。

弘化4年（1847）佐渡を訪れた幕末の探検家松浦武四郎の紀行文には、相川中尾間歩を見学した後、灯明の煤を散らすために「煤流し」といって、地役人からお神酒が振舞われたことが書かれています。

◆市役所世界遺産推進課（金井コミュニティセン
ター内） ☎63-5136



落石防止の現場。灯明皿を置く所を棚という



紙燭を持ちはしごを登る穿子



手に釣を持ち、鉱石を背負う穿子

